



老人憩いの家へ句碑のご寄附。金婚を記念して渡辺松山(平七)さん。

老人憩いの家の庭前のみこと、この俳句の作者富安風生先生は、今年八十九才の高令であられます。が、現在読売俳壇の選句を担当され、昭和四十六年に当社の業績によって芸術院賞を受賞、名実ともに現俳句界の大御所であります。

この作は又、先生が八十才の新春を房州鴨川で迎えられた際のものであります。が、やはりこの句を聞き知った方々の手によつて同地に句碑として建てられております。先生は又俳句結社「若葉」の総帥でもあり、か

壺井栄というう女の人のこととのための読み物に「柿の木のある家」といいう作品があります。その名にあつて、私はこの町の「柿の木のある町」とよんだりいたします。

小須戸の町にはずいぶんたくさん柿の木があります。秋の晴れた日に私は町の裏側の道を通つてみました。紅い柿の実がたくさん秋の陽をうけて光つて見えました。近くの畠では、かたに袋をさげて、木にのぼつてせつせと柿の実をとつてありました。私は昔、母につれられて小須戸のこの町に、たびに来たことがありました。「新保の柿」といってからなづきまつて柿の実がありました。「新保の柿」といってからなづきまつて柿の実がありました。

小須戸のみやげの中には

小須戸の木がある。木の実が

秋の晴れた日、木の実が

秋の晴れた日、木の実が